

# 大和における前方後円墳祭祀の成立

国立歴史民俗博物館名誉教授・奈良県立橿原考古学研究所研究顧問

白石 太一郎

## はじめに

主催者から与えられたテーマは「大和における前方後円墳祭祀の成立」というものであるが、私には前方後円墳に於いて具体的に実修された祭祀行為についてはまったくわからない。ただ列島各地に、定型化した同じような形態・構造の特異な墳墓である前方後円墳が出現するということは、各地の首長の死に際し同じ来世観にもとづく同じような葬送祭祀が行われたことを意味するものであろう。この報告がタイトルに反して、「大和における前方後円墳の成立」ととどまるものであることを、まずお詫びしておきたい。

## 1. 大和の初期の大型前方後円墳

私は、のちに「大王」「天皇」と呼ばれることになる3世紀中葉から4世紀後半段階の初期ヤマト政権の盟主の墓は、すべて畿内の大和、すなわち奈良盆地に営まれたと考えている。最初の6代ほどは、すべて盆地東南部、すなわち本来の“やまと”の地にあり、桜井市纏向古墳群の箸墓古墳→天理市大和（おおやまと）古墳群の西殿塚古墳→桜井市鳥見山古墳群の外山（とび）茶臼山古墳→同じくメスリ山古墳、→天理市柳本古墳群の行燈山古墳（現崇神陵）→同じく渋谷向山古墳（現景行陵）がそれにあたる。その後5世紀になるとそれは大阪平野南部の百舌鳥・古市古墳群に営まれるようになるが、その直前の4世紀後半には、盆地北部の“曾布”の地の佐紀古墳群に2代ほど営まれたらしい。

これらのうち初期の6代の王墓は、すべてこの“やまと”の地の纏向、大和、鳥見山、柳本の4古墳群にみられる。初期の「ヤマト政権」の盟主、すなわち倭国王には、すべてこの“やまと”の地の4つほどの政治勢力が交替で就いていたらしいことが伺われるのである。これら“やまと”の初期の歴代王墓のなかで最初のものが箸墓古墳であろうと想定されるが、このことについてまったく異論はみられないようである。まさに箸墓古墳はヤマト政権の初

代の盟主が営んだ、最初の定型化した巨大前方後円墳と認められているのである。ここではまず、この箸墓古墳の実像から探ってみることにしよう。

## 2. 箸墓古墳の実像

よく知られるように、箸墓古墳は神体山三輪山の西麓に営まれた大型前方後円墳で、『魏志』倭人伝にみられる卑弥呼に擬する説もある孝霊天皇皇女のヤマトトヒモモソヒメの墓として宮内庁が管理している。その墳丘長は280mもある。吉備系の特殊壺形・器台形埴輪の出土などから、出現期の前方後円墳であることが知られており、それは墳丘造営のための土取り場跡と想定される外濠状施設から出土した土師器の付着物に対する炭素年代測定など、最近の自然科学的な年代測定の結果からも裏付けられている。3世紀中葉ないし中葉過ぎのものとする研究者が多い。

墳丘の遺存状況はきわめて良好で、最近の航空レーザー測量図などからも後円部は4段に築成され、その上に径44m、高さ5mの円壇が載ることが判る。前方部も4段築成で、その頂上部は先端部が高く、くびれ部にかけて次第に低くなるが、後円部と接する部分でまた高くなり、その頂上は後円部の円壇を載せる4段目上面の平坦面に接続している。

宮内庁管理地外の墳丘周辺部の状況も、最近の桜井市の努力により次第に明らかにされつつある。まだ全体像は不明であるが、墳丘の周囲には幅12mほどで数カ所の渡り土手を持つ周濠が巡り、その周囲には幅10~20m程度の外堤が全周し、さらにその外部には大規模な不整形の輪郭の外濠状の落込みがあつて、墳丘の土取り場ではないかと想定されている。墳丘斜面には、後円部上の円壇部分を含めて葺石が施されている。また後円部の円壇上やその周辺には吉備系の特殊壺形・器台形埴輪が配されていたことが知られている。

埋葬施設や副葬品については何も知られていない。ただ最近奈良盆地東南部の広義の「オオヤマト古墳群」の前期古墳の発掘を伴う調査が奈良県立橿

原考古学研究所によって進められ、この地域の出現期から前期古墳の埋葬施設の状況が次第に明らかにされつつある。

そうした中で同研究所の岡林孝作氏が、この地域の最近の調査成果をもとに竪穴式石室の構造やその木棺に関する研究を意欲的に進めておられる。同氏は最近この地域で調査された前期古墳の棺槨の詳細な比較研究にもとづき、それら初期の竪穴式石室を大和古墳群の中山大塚古墳にみられる竪穴式石室Ⅰ群から柳本古墳群の黒塚古墳の竪穴式石室Ⅱ群、大和古墳群の下池山古墳にみられる竪穴式石室Ⅲ群に分類し、墓壙が中山大塚・黒塚の三段墓壙から下池山の二段墓壙に変化し、木棺も中山大塚にみられる舟形木棺から黒塚・下池山にみられる割竹形木棺へ変わり、さらに石室の基底部構造や壁体構造もそれぞれ変化していることを明らかにされた。

この岡林氏の研究成果を重視すると、箸墓古墳と同じ都月型の特殊壺形・器台形埴輪を伴う中山大塚古墳にはⅠ群の竪穴式石室が採用されていることから、箸墓古墳もまたⅠ群の竪穴式石室を持つ蓋然性がきわめて高いことが知られる。中山大塚古墳と同じ様な古式の竪穴式石室を採用しているものと思われる。

副葬品については確実なことは何もわからないが、吉備系埴輪などから前期初頭の古墳と考えられることから、同時期の他の多くの古墳と同様、その組合せは異なろうが三角縁神獣鏡をはじめとする多量の銅鏡類、装身具類、鉄製・銅製武器武具、鉄製農工具、その他威儀具などを伴っていたことは想定して誤りなかるう。

### 3. 大和における大型前方後円墳成立の意味するもの

大和における前方後円墳成立の意味するものを考えるために、出現期としては大和ばかりでなく、列島最大の規模を持つ箸墓古墳の様相を簡単に整理してみた。よく知られるように第2次大戦後の考古学的な古墳研究の進展の結果、古墳は「ヤマト政権」と呼ばれる当時の汎列島の首長連合・政治連合の政治体制、政治秩序と密接な関係をもって造営されたものと考えられている。この「ヤマト政権」の成立期と想定される3世紀中葉の大和の巨大前方後円墳は、まさにこの時期の「ヤマト政権」の盟主、すなわち初期の倭国王の営んだものにほかならないと

考えられる。

そのことを端的に表しているのは、この箸墓古墳には弥生終末期に吉備地方の有力な首長墓に供献されていた吉備系の特殊壺形・器台形埴輪がもたらされていることである。これは成立したばかりのヤマト政権の盟主である大和の王の葬送のために、吉備の大首長が献じたものと想定されるのである。

また箸墓古墳の竪穴式石室には、大和の西に隣接する河内との境に位置する二上山系の芝山の玄武岩の板石が用いられていたらしいが、同じ畿内でも北の淀川水系の大阪府茨木市の紫金山古墳やさらに西の兵庫県神戸市の西求女塚古墳の竪穴式石室の石材には、徳島県の吉野川流域の結晶片岩が運ばれ、用いられている。これは竪穴式石室それ自体が四国東部の讃岐や阿波で生み出されたもので、竪穴式石室の構築自体が、それを生み出した四国東部の首長の協力によってなされた可能性が大きいことを示しているのである。

このように、古墳はまさに各地の政治勢力の首長たちがともに、それぞれの伝統的な墓づくりの技術を持ち寄って、共に造るものであったと思われるのである。さきにふれた「ヤマト政権」という首長連合・首長同盟のあり方を、具体的に表現する機能をも持ったものであったと思われる。こうした共通の約束事にもとづいて、ともに造営される王墓、首長墓が古墳にほかならないのであり、その造営が、「ヤマト政権」という首長連合・首長同盟の維持・発展に一定の役割を果たしたことは想像に難くない。その際、各地に造営される古墳のモデルとして、大和の王墓が果たした役割は決して小さくなかったと考えられる。

こうした共通の来世観・死生観や彼らの政治連合に対する基本的な認識に基づいて、亡き首長のために共通の様式の墓としての古墳を造営し、その冥福と亡き首長の共同体、さらには「ヤマト政権」それ自体の安寧とそれへの加護を祈る行為が、まさに前方後円墳祭祀、古墳祭祀にほかならなかったのではなかるうか。

### 4. 初期ヤマト政権の版図

このように出現期の前方後円墳を中心とする古墳は、新しく成立した「初期ヤマト政権」と呼ばれる首長連合の政治秩序を表現するものであり、そこで古墳の造営という行為そのものや共通の葬送祭祀

の執行が、この「ヤマト政権」の政治体制や政治秩序の維持・発展にきわめて重要な役割を果たしたものと想定されるのである。

この初期ヤマト政権の版図は、まさに出現期の前方後円墳・前方後方墳の拡がりそれ自体が表現しているが、あらためてこの広域の政治連合である「ヤマト政権」の版図とその形成の要因を整理しておこう。すでに各所で論じたところであるが、私はこの「初期ヤマト政権」の原型は「邪馬台国連合」にほかならないと考えている。弥生時代後期になって南島と東北半部以北を除く日本列島は本格的な鉄器の時代を迎える。ただこの時期日本列島では鉄生産は行われておらず、鉄資源はすべて朝鮮半島東南部の鉄に依存していた。このいわゆる「弁辰の鉄」を列島に輸入するのに主導的役割を果たしていたのは、いうまでもなく北部九州の玄界灘沿岸諸国であった。

このため瀬戸内海沿岸から近畿中央部の畿内地域の勢力が鉄資源を入手しようとする多額の代償を支払わなければならなかった。それでは次第に重要になる鉄資源の安定的な確保はおぼつかない。このため、瀬戸内海沿岸各地から畿内の諸勢力が同盟を結んで、玄界灘沿岸を制圧して鉄資源の安定的確保を狙ったものと想定される。こうして出来上がったのが「畿内・瀬戸内連合」、すなわち「邪馬台国連合」であり、そのリーダは邪馬台国、すなわち大和であった。玄界灘沿岸の伊都国には「一大率」が置かれ、邪馬台国から派遣された役人が輸入物資などを管理・統制していたらしい。

このように邪馬台国連合は、日本海への出口を玄界灘沿岸地域によって抑えられていた瀬戸内海～畿内地域の諸勢力が連合し玄界灘地域を制圧したもので、それ以前から独自の交易ルートを持っていた出雲や丹後など日本海沿岸地域は加わっていなかったものと思われる。出雲や丹後の弥生後期の墳丘を持つ首長墓からは多量の鉄器が出土しており、同時期の畿内の大和や河内のあり方とは大差がみられるのである。

この邪馬台国連合がそのまま初期ヤマト政権になったと考える研究者もいるが、私は邪馬台国連合段階から初期ヤマト政権の成立に至るには、邪馬台国連合と狗奴国連合の争いが不可避であったと考えている。邪馬台国時代、畿内以東の地域では、邪馬台国の中枢部での前方後円形墳丘墓の盛んな造営に

対して、前方後方形墳丘墓の造営が広く認められる。それは濃尾平野を中心に関東地方にまで及んでおり、私はその地域がまさに狗奴国とそれを盟主として連合する狗奴国連合の範囲を示すものと考えている。『魏志』倭人伝は、卑弥呼の晩年、邪馬台国と狗奴国との争いを伝えるが、その結末については触れていない。その後の歴史の流れからも、この戦いは西の邪馬台国連合の勝利に終わり、これに東の旧狗奴国連合の広大な地域が加わって成立したのが「初期ヤマト政権」にほかならないと考えている。

## 5. 箸墓古墳の造営

さきに述べたように箸墓古墳の造営が3世紀中葉ないし中葉過ぎであることは疑いない。卑弥呼の死が正始8年(247)の直後であることは疑えないから、この時期における箸墓古墳というそれまで考えられなかった巨大な前方後円墳の造営を考えると、その被葬者の候補として卑弥呼以外の人物を想定するのはきわめて困難である。さらに狗奴国との戦争、卑弥呼没後の後継者争いなどと並行して、こうした倭国始まって以来の巨大な前方後円墳の造営が可能であったとは考え難い。したがって少なくとも10年以上の年月を要したと思われる箸墓古墳の造営は、邪馬台国連合と旧狗奴国連合が合体して「初期ヤマト政権」が成立し、その王に卑弥呼の後継者である台与が就任して以降のことであろうと思われるのである。

またその造営事業の中心となったのも後継者である台与であったと考えるほかない。ただそれは、邪馬台国の王、あるいは邪馬台国連合の盟主の墓としてではなく、あくまでも新しく成立した「倭国」の初代の王の墓として造営されたものであろう。それは、オオヤマト古墳群における初期の6代の王墓群における箸墓古墳の地理的・年代的な位置からも明らかであろう。なお最近、古墳の造営は、その被葬者が王位、ないし首長位に就いた直後から始められたものであったろうとする意見を持つ研究者もいる。しかし古墳の造営は古墳時代を通じて、ここに卑弥呼の場合について想定したように、その後継首長が就任した時に始まるものであったと考えるべきではなかろうか。古墳の造営という行為それ自体が、首長権継承、ないしそれに関わる儀礼の側面を持っていたと考えられるからである。

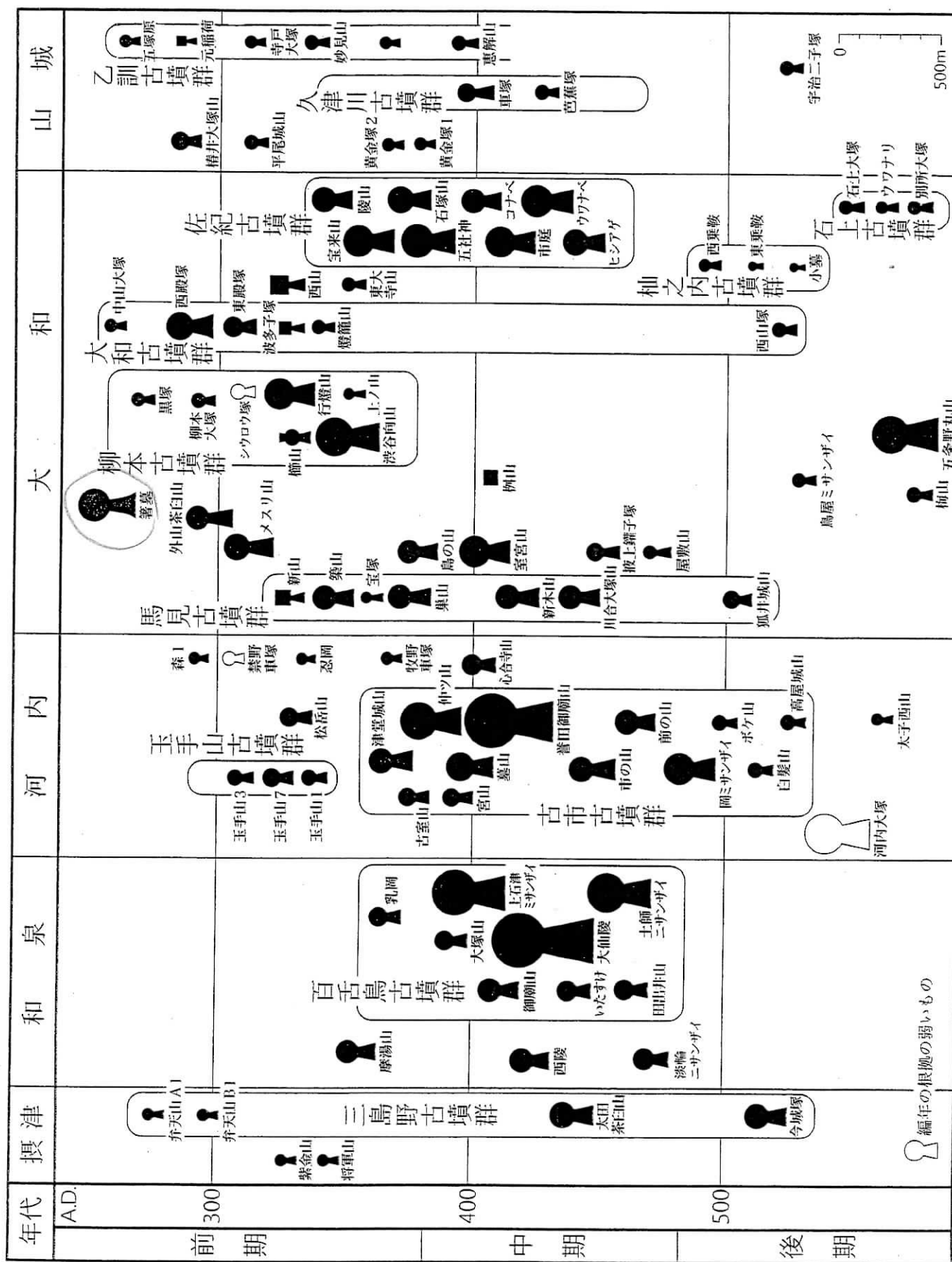


図9 畿内における大型古墳の編年